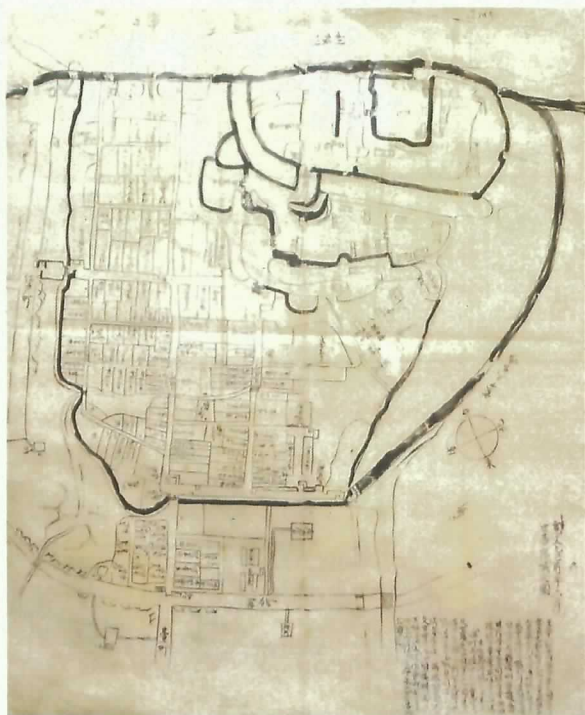


(3) 関宿藩士

関宿藩の藩士は、城代・中老・家老を筆頭に、およそ 500 人で組織されていました。

藩士の多くは、関宿城内の小姓町や鷹匠町、久保町の武家屋敷に住んでいました。「世喜宿城之図」には 100 余りの屋敷地が示されています。また、江戸の日本橋箱崎(中央区)、深川(江東区)、小日向(文京区)の 3ヶ所に藩邸をもち、およそ 100 人の藩士が「江戸詰」として勤務していました。

後世に名を残した関宿藩士には、農学を深く研究して「関宿落とし」の開削や大島埜地の開発を指揮し大規模な新田開発を成功させ、幕末の久世広周のときに「農兵隊」を組織するなど藩政に尽力した船橋随庵、久世広周の命により国後島に渡るなど蝦夷地を探検した成石修輔、久世暉之に仕えたときに熊沢蕃山の影響を強く受け、『田舎荘子』を著した佚斎樗山(本名：丹羽十郎右衛門忠明)などがいます。



○関宿藩士の花押

○世喜宿城之図

江戸後期

城郭や堀、城下町が墨で書かれている。御三階櫓のほかに蔵などの位置も示され、さらに、家臣団屋敷に姓名が注記されているのが特徴である。



○御家中指物帖

各藩士の指物をまとめたものである。「卍」や「日の丸」が多いが先端の飾りはそれぞれ独特なデザインが見られる。